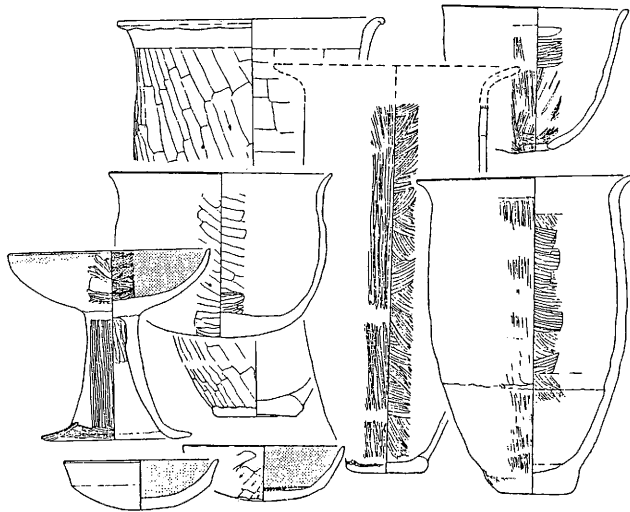


中之条遺跡群

宮上遺跡Ⅱ

——坂城町立坂城中学校改築工事第3期工事に伴う緊急発掘調査概要報告——



1993

坂城町教育委員会

中之条遺跡群

宮上遺跡Ⅱ

—坂城町立坂城中学校改築工事第3期工事に伴う緊急発掘調査概要報告—

1993

坂城町教育委員会

序

坂城中学校は、旧中之条・坂城・村上の三中学校を統合し、昭和35年に現在地に建設されてから、9,038名の卒業生を送り出してきましたが、この校舎も30余年の歳月を経た結果、老朽化が進んできました。

坂城町は、21世紀の担い手である生徒諸君のために、中学校校舎の全面改築をすることになりました。現在地改築の事業であります。旧校舎建設当時は諸事情があって埋蔵文化財の発掘調査がなされずに、建設された経過があります。このたびは改築事業に伴って、中之条遺跡群の一部である用地を『坂城中学校改築事業に伴う緊急発掘調査』として事前調査をし、記録にとどめることができました。調査面積は、約2,460平方メートル、調査期間は平成4年6月2日から9月4日まででありました。

調査の概要は、古墳時代後期から平安時代までの竪穴住居址16棟、掘立柱建物址1棟、土坑1基、溝状遺構3条の他数々の遺物が、記録保存されましたことを慶びたいと思います。

なお、今回の発掘調査が町民の皆さんの文化財に対する関心を深め、郷土の歴史の解明に資するとともに、ひいては明日の心豊かで調和と活力のある町づくりに、つながることを期待してやみません。

本調査にあられました団長の森嶋稔先生・長野県教育委員会・調査団の関係各位はじめ、快く作業にご協力くださった皆様に心から敬意と、感謝を申し上げる次第であります。

平成5年3月




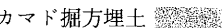

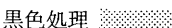
坂城町教育委員会 教育長 島田雅男

例 言

- 1 本書は、坂城中学校改築第3期工事に伴う、中之条遺跡群宮上遺跡（みやのうえ）Ⅱの埋蔵文化財発掘調査の概要報告である。なお、今回の発掘調査により、新たに宮上地籍を宮上遺跡と命名した。
- 2 発掘調査所在地及び面積
中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ 長野県埴科郡坂城町大字中之条926 面積 2,460㎡
- 3 調査期間 平成4年6月2日～9月4日（現地調査）
- 4 中之条遺跡群宮上遺跡の発掘調査は、平成3年度に第1・2期工事に関連し、試掘・本調査（未報告）を行っており、今回の調査が第2次調査にあたる。
- 5 本書の編集・執筆は、森嶋調査団長の指導のもとに助川が行った。
- 6 本書の作成にあたっての諸作業は、調査団で協力して行った。
- 7 本書及び調査に関する資料は、坂城町教育委員会の責任下において、保管されている。
- 8 本調査及び本書の作成にあたって、下記の方や機関から、御指導御意見を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略 50音順）

青木和明、青木一男、赤松 茂、市沢英利、今福利恵、臼田武正、川上 元、児玉卓文、小林真寿、小山岳夫、佐藤信之、坂井美嗣、坂本美夫、塩入秀敏、須藤隆司、瀬田正明、高村博文、堤 隆、西沢 浩、羽毛田卓也、林 幸彦、福島邦男、堀田雄二、丸山徹一郎、三石宗一、翠川泰弘、矢口忠良、矢島宏雄、坂城中学校、(社)シルバー人材センター

目 次 凡 例

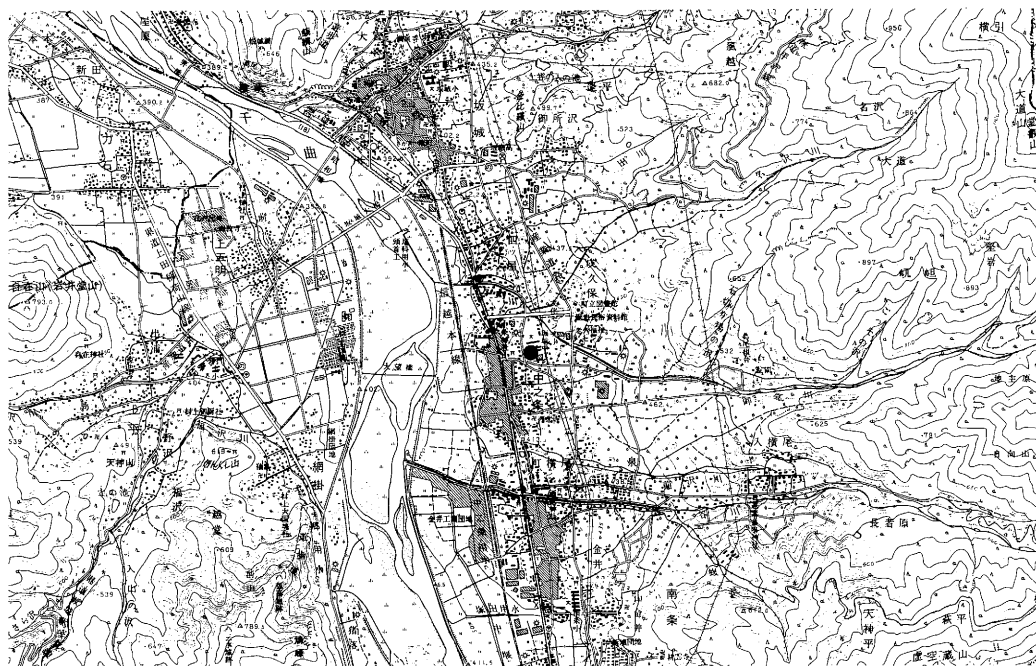
序	1 各遺構の略号は、下記のとおりである。
例言	H→竪穴住居址 F→掘立柱建物址
凡例	D→土坑 M→溝状遺構・河川址
第Ⅰ章 発掘調査の経緯……………1	2 遺構名は、時代別ではなく、命名順である。
第1節 発掘調査に至る動機と経緯……………1	3 実測図の縮尺は下記のとおりである。
第2節 調査団の構成……………2	住居址→1/80 カマド→1/40
第3節 調査日誌……………2	遺構配置図→1/600 遺物実測図→1/4
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境……………4	4 挿図中におけるスクリーントーンは、下記のものを示す。
第1節 地理的環境……………4	1) 遺構断面  カマド 
第2節 歴史的環境……………4	焼土  カマド掘方埋土 
第Ⅲ章 基本層序……………6	2) 遺物
第Ⅳ章 調査……………7	 の断面 須恵器
第1節 検出された遺構・遺物……………7	黒色処理 
第2節 遺構・遺物の概要……………9	
第Ⅴ章 まとめ……………22	5 土層色調は『新版 標準土色帖』の表示に基
あとがき	いて示してある。

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機と経緯

中之条遺跡群は、坂城町大字中之条に所在し、御堂川によって形成された扇状地の扇中部に位置し、標高408～458m前後と経緯を測る。平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると、縄文～平安時代の複合遺跡とされ、昭和48年に隣接する北浦遺跡では、学校給食センター建設工事中に、竪穴住居址2棟が確認されている。また、平成3年には、校舎の老朽化により『坂城中学校全面改築第1・2期工事』が計画された。7月には試掘調査が実施され、遺構が検出されたため、記録保存を目的とした緊急発掘調査が行われた。旧校舎建設時に削平盛土をした経緯があり、破壊が著しく土坑数基と河川址のみであった。また10月には、第3期工事に関連し、破壊の状態と遺構の状況把握のために、試掘調査及び本調査がなされた。(第1次調査)

今回、第2期工事に伴う遺跡の破壊から、記録保存することを目的として発掘調査を緊急に行うよう、長野県教育委員会文化課、地元研究者森嶋稔先生、町教育委員会の保護協議の結果、決定した。調査は、平成4年5月に校舎を解体し、6月初頭から開始した。9月には建設工事に入るといった計画の中であった。



第1図 中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ位置図 (1 : 50,000)

第2節 調査団の構成

(事務局) 坂城町教育委員会

教育長 島田雅男 社会教育課長 塩野入猛 学校教育課長 竹内源一郎
文化財係長 山崎政弘 文化財係 助川朋広・小平光一 学校教育課 高橋卓也

(調査団)

団 長 森嶋 稔 (日本考古学協会、長野県考古学会、千曲川水系古代文化研究所
主幹)

担 当 者 助川朋広 (坂城町教育委員会学芸員、日本考古学協会)

調 査 員 郡山雅友 (町臨時職員)

調査補助員 小平光一 (坂城町教育委員会学芸員、長野県考古学会)

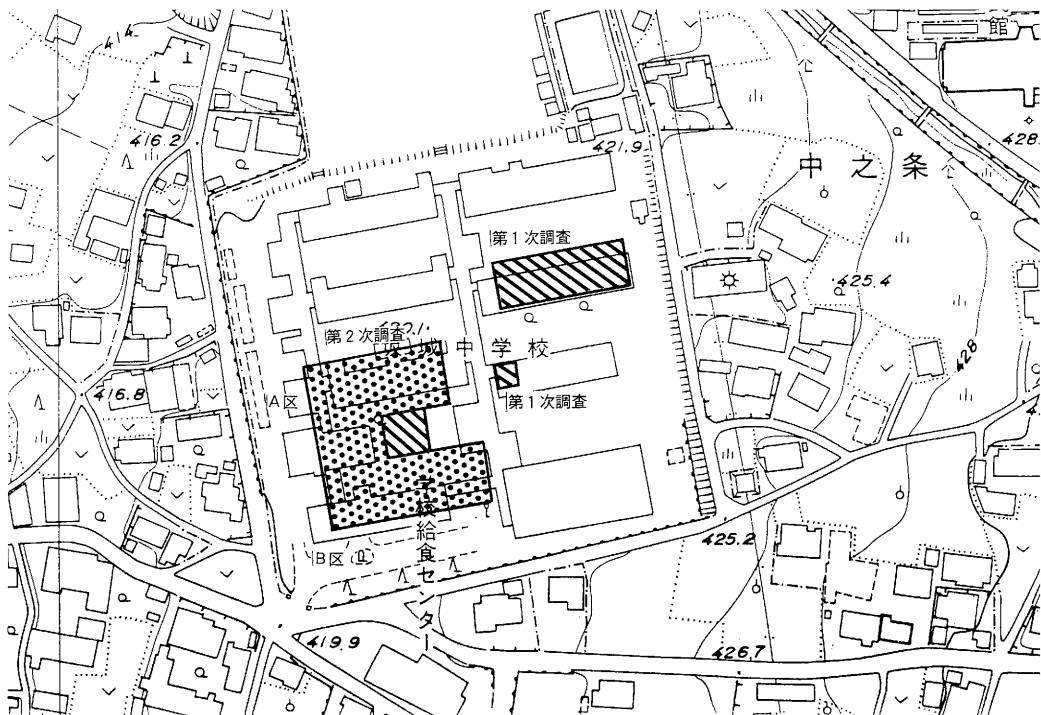
協 力 者 中村久子、宮尾美代子、春原かずい、萩野れい子 (以上、町臨時職員)

(五十音順) 浅井重登、朝倉三郎、阿野道生、飯島みね子、石井和美、伊藤 篤、上野かずえ、
窪田盛次、小林さよ子、小林久寛、塩入孝次、高橋幸世、竹内清志、竹前夏代、
達家みきえ、田中 勤、塚田智子、塚田良子、中島千津子、中村さつき、
中村正成、中村光栄、中村容民、西沢茂五郎、西沢光代、西沢善人、日向正義、
山崎貞子、横江豊子 (以上、更埴広域シルバー人材センター)
長谷川和幸、渡辺照夫 (以上、高校生)

第3節 調査日誌

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 6月2日 | 重機による表土除去作業の開始。 | 7月2日 | 遺物包含層が厚く、検出作業に困難なため、サブトレンチを設定。 |
| 6月6日 | テント・機材の搬入を行う。 | 7月3日 | M2・M3周辺の検出作業に力を入れる。(河川址と判明) |
| 6月8日 | 雨のため、予定していた結団式が延期。本日でA区の表土除去作業終了。 | 7月8日 | M2の調査終了。 |
| 6月9日 | 結団式を行い、協力者を加えて、遺物包含層の掘り下げ、カクランの除去作業を行う。 | 7月17日 | H1住調査開始のほか遺物包含層掘り下げ継続。連日の暑さと、礫の多さなどにより作業が困難。 |
| 6月15日 | M1溝状遺構検出。礫が多く作業が困難。 | 7月20日 | H2住・H3住調査開始。 |
| 6月22日 | 協力者の人員増す。 | 7月22日 | B区の表土除去作業開始。 |
| 6月26日 | H1住検出。 | 7月24日 | H4住・H5住調査開始。埋め戻しまで、日数少なし、調査急ぐ。 |

- | | | | |
|-------|---|----------------|---|
| 7月25日 | 町文化財保護審議会視察。 | 8月18日 | H 8住・H12住・H13住・H15住
調査を行う。 |
| 7月28日 | 午前中のみでA区の調査を終了。
工事開始のため、A区埋め戻し。
B区の検出作業を行い、H 7住・
H 8住、F 1の調査を開始する。 | 8月19日 | M 3の掘り下げを行う。
H 8住カマド調査を行うが、袖部
が非常に堅い。 |
| 7月29日 | H 8住の切り合い把握のため、サ
ブトレンチによる調査を行う。 | 8月22日 | ピット群の調査を行う。 |
| 7月31日 | A区第1回目埋め戻し終了する。 | 8月25日 | D 1の調査開始。
B区一部埋め戻しを開始する。 |
| 8月3日 | H 8住付近拡張する。 | 8月28日 | B区一部埋め戻し終了。最終部分
の表土除去し、H16住調査開始。 |
| 8月4日 | H 8住・H 9住・H10住検出作業。 | 9月2日 | 機材搬出及び、調査終了準備。 |
| 8月5日 | 埋め戻し実施のため、H 9住の調
査を急ぐ。 | 9月4日 | H16住調査終了後、終了式を行う。 |
| 8月8日 | H 9住調査終了後、B区一部埋め
戻しを行う。 | 9月5日～平成5年3月31日 | 室内において
整理作業を行う。 |
| 8月10日 | H 8住・H10住・H12住の調査。
連日の暑さで、作業が困難。 | 9月25～26日 | 坂城中学校文化祭にて、出土
遺物の展示を行う。 |



第2図 調査区設定図 (1 : 2,500)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

埴科郡坂城町は、東信濃と北信濃の接触点にあたり、善光寺平南部を構成する更埴地方の最南端に位置する。県の東部から北部を貫流する千曲川は、上田・小県盆地の北端である右岸に位置する塩尻の岩鼻と、左岸の半過の岩鼻から、坂城広谷と呼ばれる貫通谷である沖積盆地をつくりだしている。そして、北の横吹の岩壁をかすめて、戸倉・上山田の沖積地へと続いていく。

坂城地域は、南では、両岩鼻が千曲川断層面の岩壁となり、東では、太郎山・鏡台山とを南北に結ぶ山稜が、上田・真田・更埴の市町村界となり、北では、五里ヶ峰から葛尾山、横吹きと自在山の岩壁がネック状となり、屏風のように連なっている。西では、大林山を主峰とする山稜が連続し、上田・上山田・坂井との市町村界となって一地域を構成している。千曲川はその地域のほぼ中央を北流しているのである。

右岸地域の坂城・中之条・南条地区と左岸地域である村上地区は、したがって播鉢状の盆地形をなす千曲川流域の独立した空間であり広谷状をなしている。地域の特徴は、右岸地域は西南する広い斜面と、いくつかの小河川や沢によってつくられた複合扇状地と千曲川沿いの沖積地であり、左岸地域は、千曲川断層面のなす岩壁と、小さな沢や岩錐、小複合扇状地というように様相を異にしていることである。

中之条遺跡群は、千曲川右岸地域に位置し、中之条地区の御堂川によって形成された、扇状地の扇央部付近で扇端の段丘上に位置している。この付近は、中之条の旧集落も発達しており、扇状地扇端部には湧水もあり、中之条用水と相まって沖積面は水田地帯となっている。

第2節 歴史的環境

現在、発掘調査例は少ない状況ではあるが、周辺遺跡について、概観してみたい。

現在最古の資料は、保地遺跡（3-1）から採集されている。数点のみであるが、上ヶ屋形彫刻器や小形の尖頭器という後期旧石器時代の石器である。

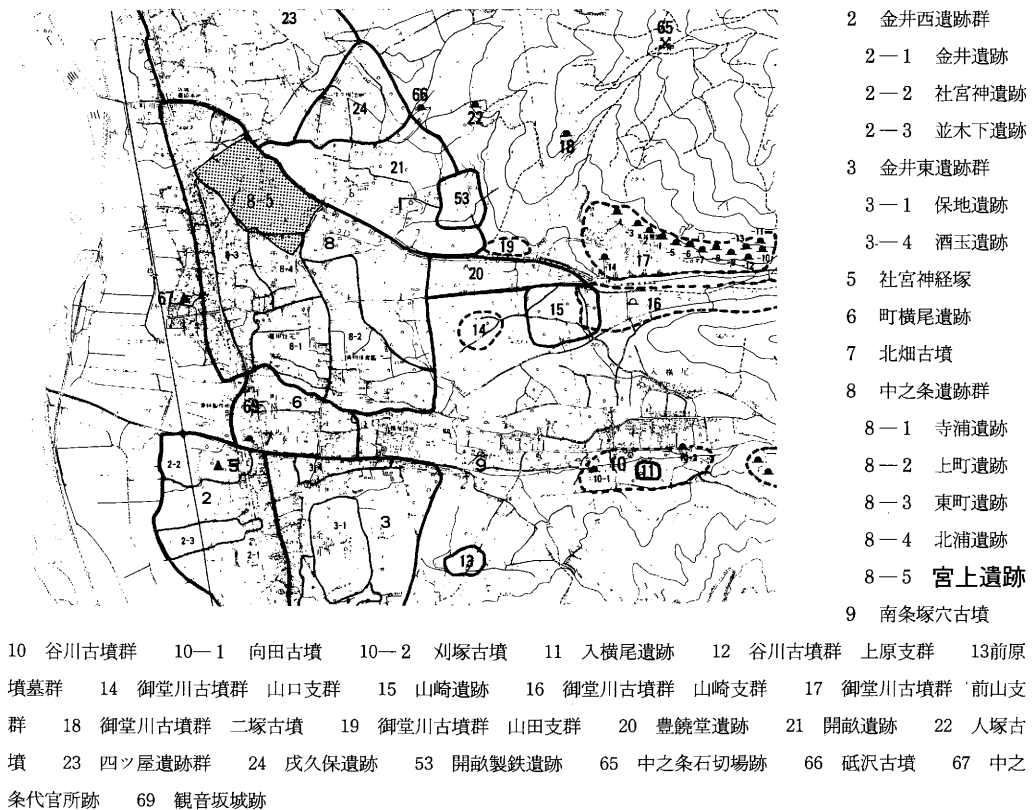
縄文時代の遺跡は、坂城地区では込山A・B遺跡など前期・中期の遺跡が発見されているが、南条地区の金井西遺跡群（2、平成3年度調査）でも早期と考えられる特殊磨石などが出土し、金井遺跡（2-1）では、中期勝坂式土器や、出尻土偶が出土している。晩期については、発掘調査で保地遺跡（3-1）から、亀ヶ岡系の土器群が出土している。これらの遺跡は、千曲川の開析による段丘状地形の上部に位置するが、近年の調査例では、千曲川沖積地においても検出され

ており、当町でも例外ではなく、東裏遺跡など（平成4年度調査）でも、中期初頭や晩期の土器が検出されはじめていますので、今後十分に考慮しなくてはならない。

弥生時代の遺跡では、千曲川の自然堤防上の南条遺跡群中町遺跡、塚田遺跡（平成4年度調査）があり、後期箱清水式土器が出土している。しかし一方では、保地遺跡（2-1）など段丘上にもみられる。

古墳時代の遺跡でも同様に、塚田、東裏遺跡の自然堤防上・後背湿地、段丘上では寺浦遺跡（8-1）、金井遺跡などが認められている。古墳については、山脚部から山腹にかけて集中している。御堂川古墳群中最大の前山支群（17-1）では、6・7世紀の後期古墳がある。なお東裏遺跡では、7世紀後半と考えられる玉造り工房址が検出されており（現在調査継続中）、既出資料では祭祀遺跡と関連する6世紀代の手捏土器や石製模造品が検出されている。

奈良時代の集落は極めて少ないが、寺浦・山金井遺跡が見られる。なお生産遺跡としては、坂城地区の土井ノ入窯跡などがある。平安時代の集落では、金井西遺跡群での検出、東町遺跡（8-3）、戊久保遺跡（24）などがあげられる。生産遺跡では、土井ノ入窯跡の瓦窯があり、信濃国分寺や尼寺、正法廃寺、坂城地区の9世紀代の寺院である込山廃寺の差し瓦として使用されてい



第3図 周辺遺跡分布図（1：30,000）

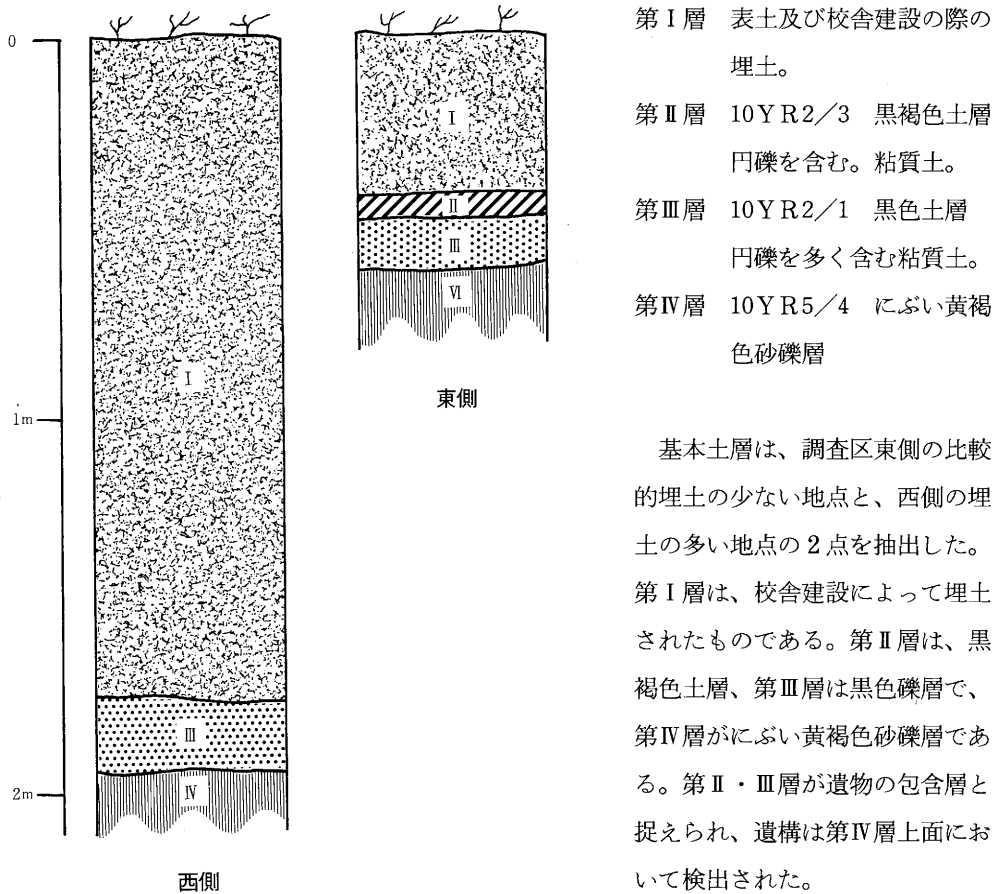
る。他に岡ノ原、雷平、垣戸、中之条地区では呪咀窯跡がある。

中世においては、県内初の調査例である開畝製鉄遺跡(53)があり、村上氏末期に比定できるものとされ、鉄の地方自給を示唆しているものと考えられる。なお南条地区でも金井・山金井といった地名があり、製鉄関係の集団がいた可能性が高い。城館跡では、坂城地区に村上氏の葛尾城跡とその下の居館址があり、中之条地区でも観音坂城跡(69)などがある。

近世となると、北国街道設置に伴い、坂木宿・鼠宿が成立し、中之条陣屋(67)が設置されるなど歴史的に重要な地域である。

以上簡単ではあるが、中之条遺跡群周辺についての歴史的環境について触れた。

第Ⅲ章 基本層序



第4図 中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ基本層序模式図

第IV章 調 査

第1節 検出された遺構・遺物

遺 構

竪穴住居址	16棟（古墳時代後期～平安時代）	掘立柱建物址	1棟（奈良時代?）
土 杭	1基（時代不明）	溝 状 遺 構	1条（平安時代）
ピ ッ ト	多数（時期不明）	河 川 址	2条（時期不明）

（遺構数及び時代、時期については、今後の検討により異なる場合もある）

遺 物

土 器

弥生土器 高坏・甕

土師器 壺・甕・小形甕・甑・坏・高坏・円筒形土器

須恵器 甕・蓋・盤・坏

施釉陶器 甕

土製品 紡錘車 羽口

鉄製品 刀子?

今回の調査は、上記のとおり遺構が検出された。現在、整理作業が終了していないという状況なので、詳細な検討がなされていない。このような状況下ではあるが、大きく遺構・遺物を概観することにした。なお調査中の所見をもとにしているため、今後図上復原させるものなど、詳細に検討がなされる場合があることを断わっておきたい。

竪穴住居址は、本報告内において16棟検出されたが、第1次調査で2棟検出されているので、総数18棟ということになる。時期的には、古墳時代後期後半～平安時代中葉ぐらいまでで、主体は古墳時代後期、奈良時代にあるように思われる。住居址の規模は、H4・16号住居址のように大型の住居と、H1・7号住居址のような小型の2タイプがあり、前者は古墳時代後期であり、後者は奈良時代のものと思われる。

住居形態は、方形を呈すものと隅丸長方形を呈すものがあり、前者は古墳時代後期、後者は奈良時代と思われる。

カマドの方向性は、西側壁面中央付近にあるものと、東壁中央付近にあるものと北壁中央付近にあるものの3タイプに捉えられる。古墳時代後期後半には、西側壁面中央付近に位置し、奈良

時代では、東壁面中央付近に位置しているようである。また、カマドのつくり変えと考えられるものがあり、H1・15号住居址がそれにあたる。

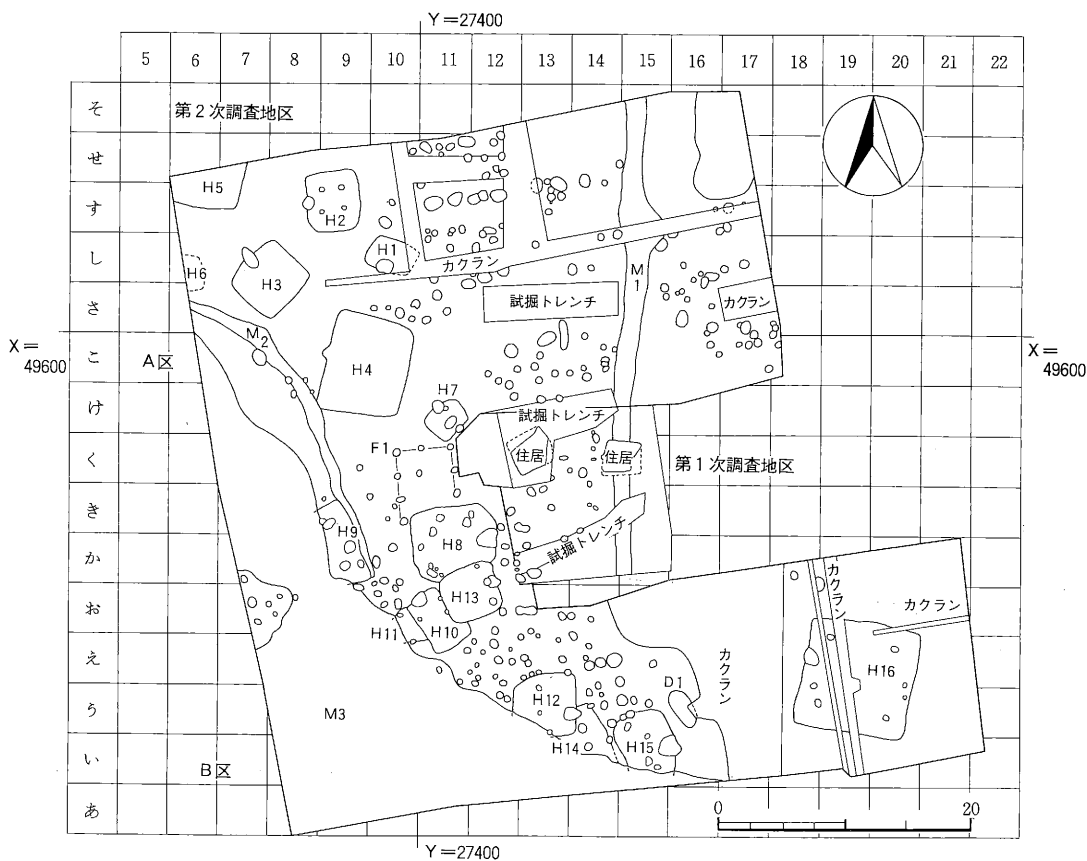
カマドの構築方法は、芯材として石を埋め込み、それを補強するために粘土で覆うタイプが一般的で、時代的な手法の変化は明らかでない。

掘立柱建物址は、1棟のみの検出で2間×4間の側柱式のものである。廂がつくのかもされない。時期的には、奈良時代の可能性がある。

土杭は1基の検出で、覆土上面に土器が集中しており、埋没過程での投棄の可能性がある。

溝状遺構は1条検出された。河川址は2条検出され、比較的新しいものと思われるが、時代を特定できない。これらの河川址は、H4・9・12・14・15号住居址を破壊している。

これらの遺構あるいは包含層から多数の遺物が出土しているけれど、まだ十分に検討も行われていない。その中でも古墳時代後期の土師器に多量の雲母が胎土に混入されているということ、奈良時代の須恵器に、生焼け状態のものが多いことが注意されることである。



第5図 中之条遺跡群宮上遺跡Ⅱ遺構配置図(1:600)

第2節 遺構・遺物の概要

1) H3号住居址

遺 構 (第6図)

本住居址は、さー7・8、しー7・8グリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係は、認められなく、平面形態は長軸4.7m、短軸4.44mを測り、比較的整った方形を呈している。カマドは北西壁中央付近に位置しカマドを軸とした主軸方位は、N-47°-Eである。住居覆土は3層に分けられ、1層は黒褐色土層、2層は焼土層で、住居の東南部分に認められた。3層は黒褐色土層である。確認面からの壁高は、約40~50cmを測り、床面からの立ち上がりは比較的急斜面で、堅固な状態であった。壁溝は検出されなかった。

床面は、地山第IV層を利用して構築され、中央部は堅固に踏み固められた状態で、平坦な床面を呈していた。支柱穴は検出されなかった。

カマドは、煙道部分及び天井部分は崩落していたが、遺存状態は良好であった。袖部の構築材としては、図示することができなかったが、両袖部分に石を配し、それをにぶい黄褐色粘土で覆って、袖部を形成する手法を取る。また左右袖部先端には、17・18土師器長胴甕を補強材としていた。支脚石が直立し、15の土師器長胴甕が出土した。火床部手前側に円筒形を呈した土師器23が横位の状態で出土した。天井部として使用していた可能性が高く、落下したものと思われる。遺物の出土状況は、本址の焼土部分より多数の完形に近い土師器が集中しており、北西コーナーでは極めて希薄な状態であった。出土遺物は、床面上のものと若干浮いた状態で出土している。本址は、焼土範囲と遺物の量から焼失家屋と見られる。

遺 物 (第7-10図)

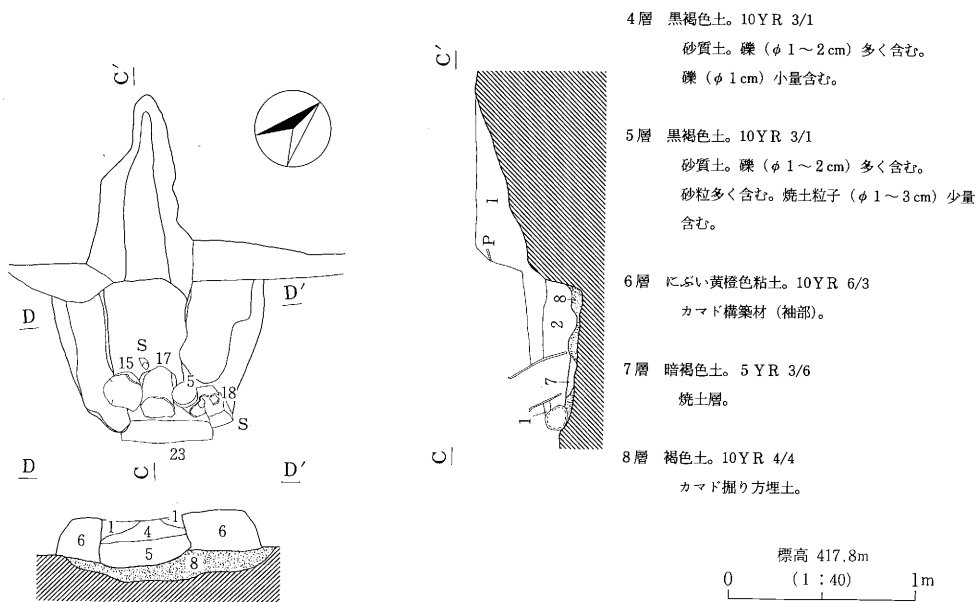
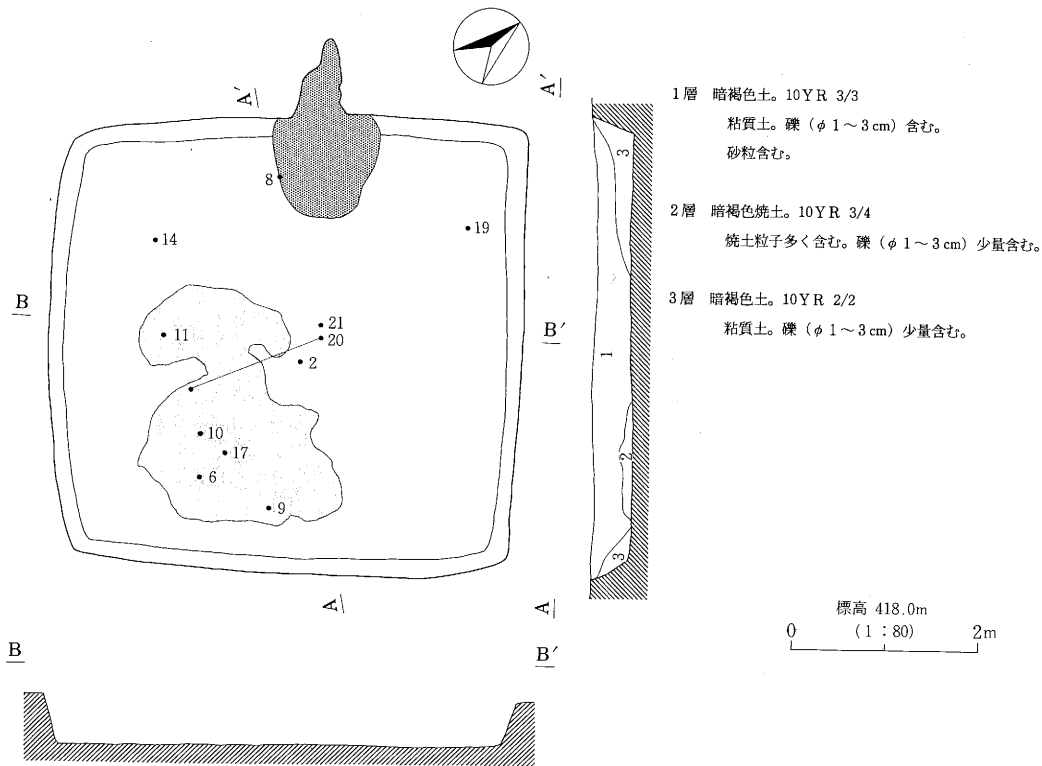
本住居址からは、弥生土器・土師器・須恵器などが出土しており、弥生土器には後期の箱清水式期と考えられる高坏の脚部があり、混入と考えられる。図示できたのは、土師器のみである。

土師器の坏は1~5があり、内面黒色処理される。4だけ外面にまで黒色処理が施されている。5は典型的な該期の須恵器模倣坏であるが、焼成が悪く異質な感がある。

土師器高坏は6~7で、6は典型的なものではあるが、外面口縁部にも黒色処理が施される。7は、白い胎土の脚部である。

土師器小形甕は8~9で、8は平底の内面黒色処理の施されたものである。9はヘラケズリの施されるものである。10は小型の甕で、雲母を含み、径2.5cmの孔を1つもつ。

胴部球状を呈すと思われる土師器の甕は14で、口縁部が「く」の字状のものと「コ」の字状のものがあり、11・13が黄白色、14が黄褐色を呈している。13は口縁端部が窪むもので、北陸系の土器と思われる。14は大型の甕で内面胴部に指頭調整が施される。

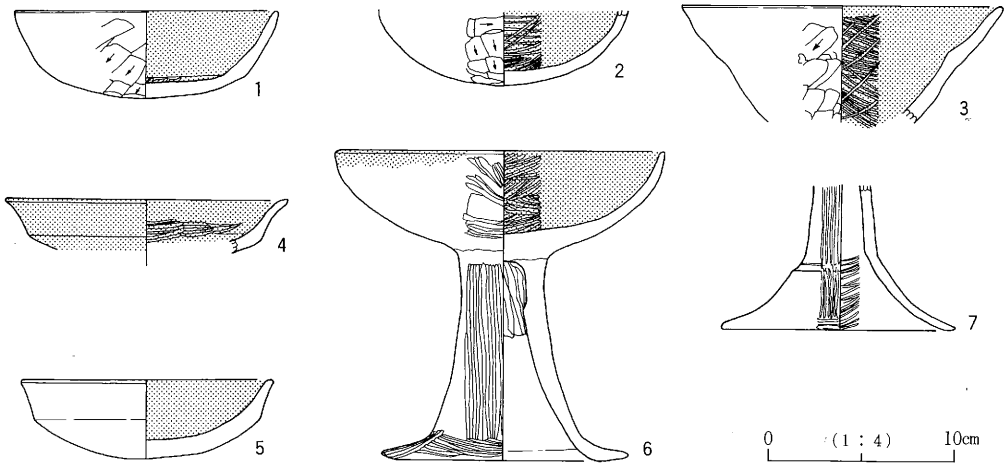


第6図 H3号住居址・カマド実測図

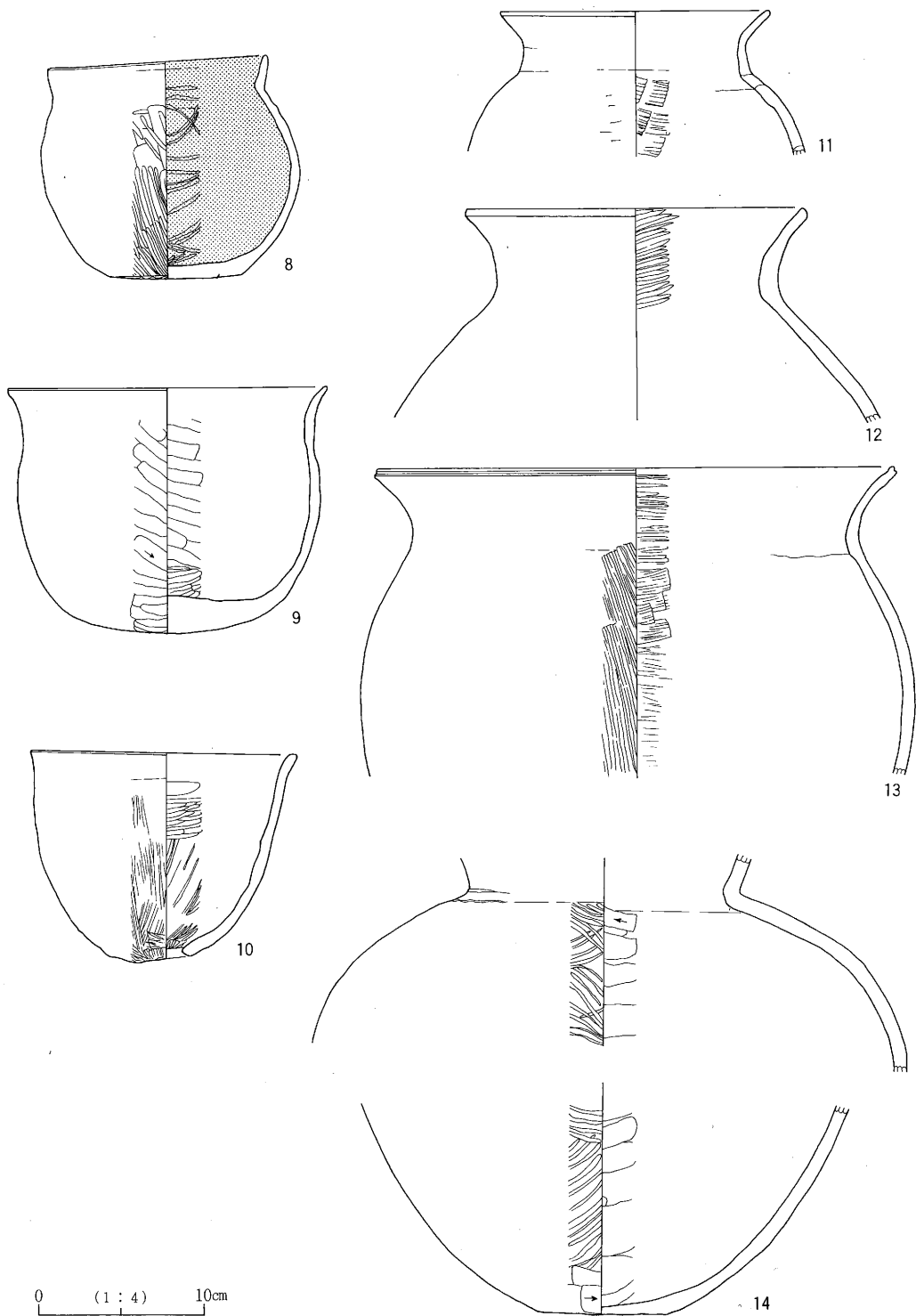
土師器長胴甕は15～22で、外面に縦位の方向にハケ調整されるもの（15～19・21）と縦位にヘラケズリの施されるもの（20・21）がある。15は胴下部で分割整形したものと考えられ、外面に粘土のはりつけが観察できる。接着部にはハケ調整が施されるが、それ以下にはハケ調整がなされず、指頭痕とナデ調整のみ観察できる。16は外面にこすった粘土のかたまりが頸部以下に観察できる。20は内外面縦位の方向にヘラケズリが施される。21は外面にハケ状調整具による縦位のケズリが施される。この器形より、甑の可能性も考えられる。なお本住居址出土の長胴甕の胎土には、長石、雲母の粒子が含まれるのが特徴であり、15・16・17・22には多くの雲母が含まれている。18だけ雲母が微量しか含まれていない。なお16・18・19・20・22には外面媒の付着がある。

土師質円筒形の土器には23があり、外面に縦位のハケ調整が、内面には上位に指頭痕とナデ調整、下位に縦位のハケ調整が施される。口縁部で潰れた状態ではあるが、基本的に円形を呈している。カマドの火熱を受けており、非常に脆いものである。

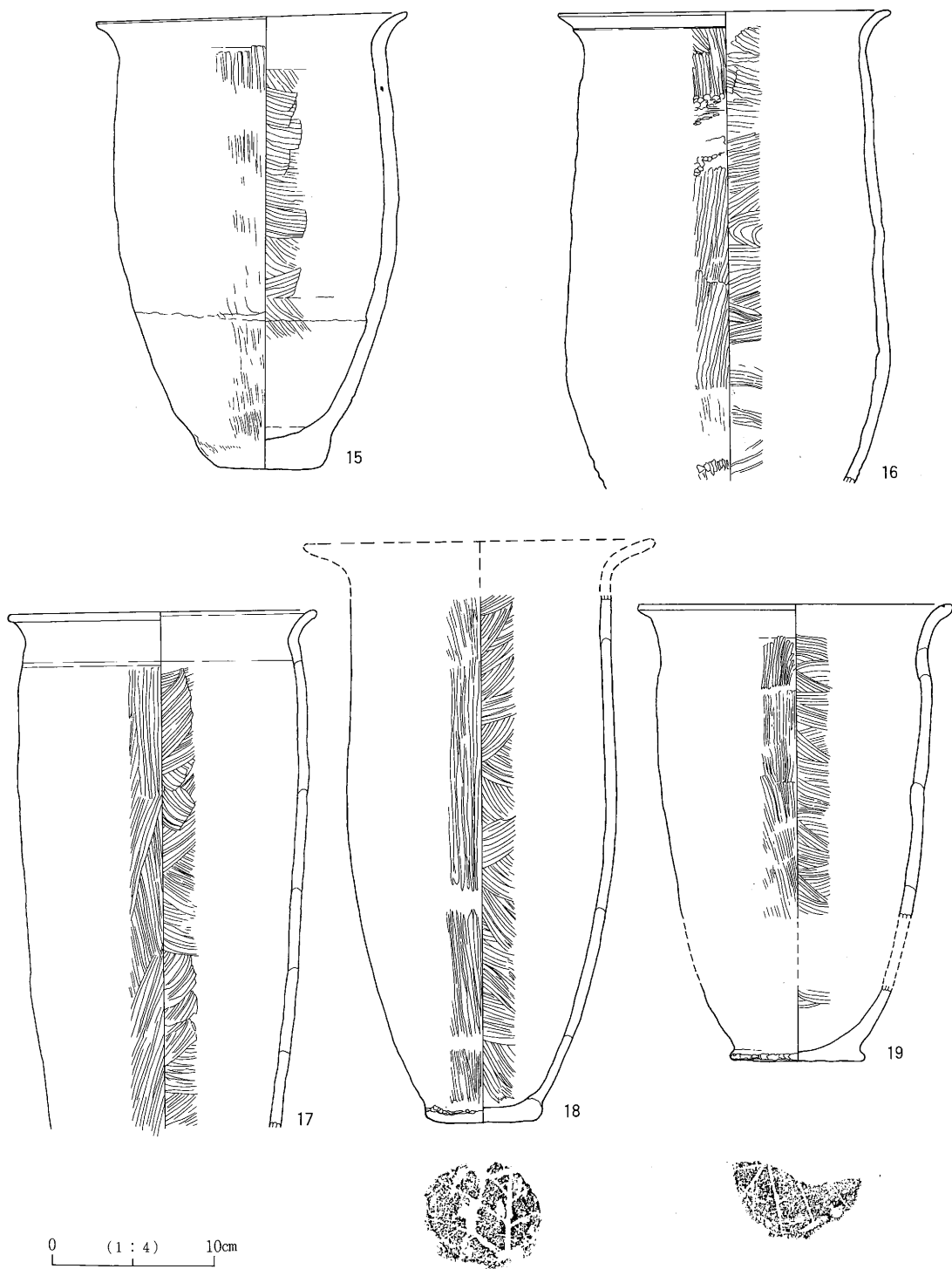
以上本住居址の出土遺物は土師器の球状の胴部を持つ甕、後期後半の典型である須恵模倣坏や高坏胴部ヘラケズリ調整が施される土師器長胴甕というような本住居址内の出土遺物は若干の時間差が見られる。この中で主体は、古墳後期後半～奈良時代初頭にあると思われる。本住居址遺物の出土の状況は先述したとおりであるが、焼土部分以下より集中して床面あるいは、約10cm前後のところから出土したことを考慮に入れると、一括遺物として扱っても大過ないと考えられる。北信地域でも現在古墳時代終末～奈良時代初頭の位置づけが確立していない状態ではあるが、本住居址の所属時期は、古墳時代後期の終末期と捉え、奈良時代への過渡期という位置づけを行いたい。



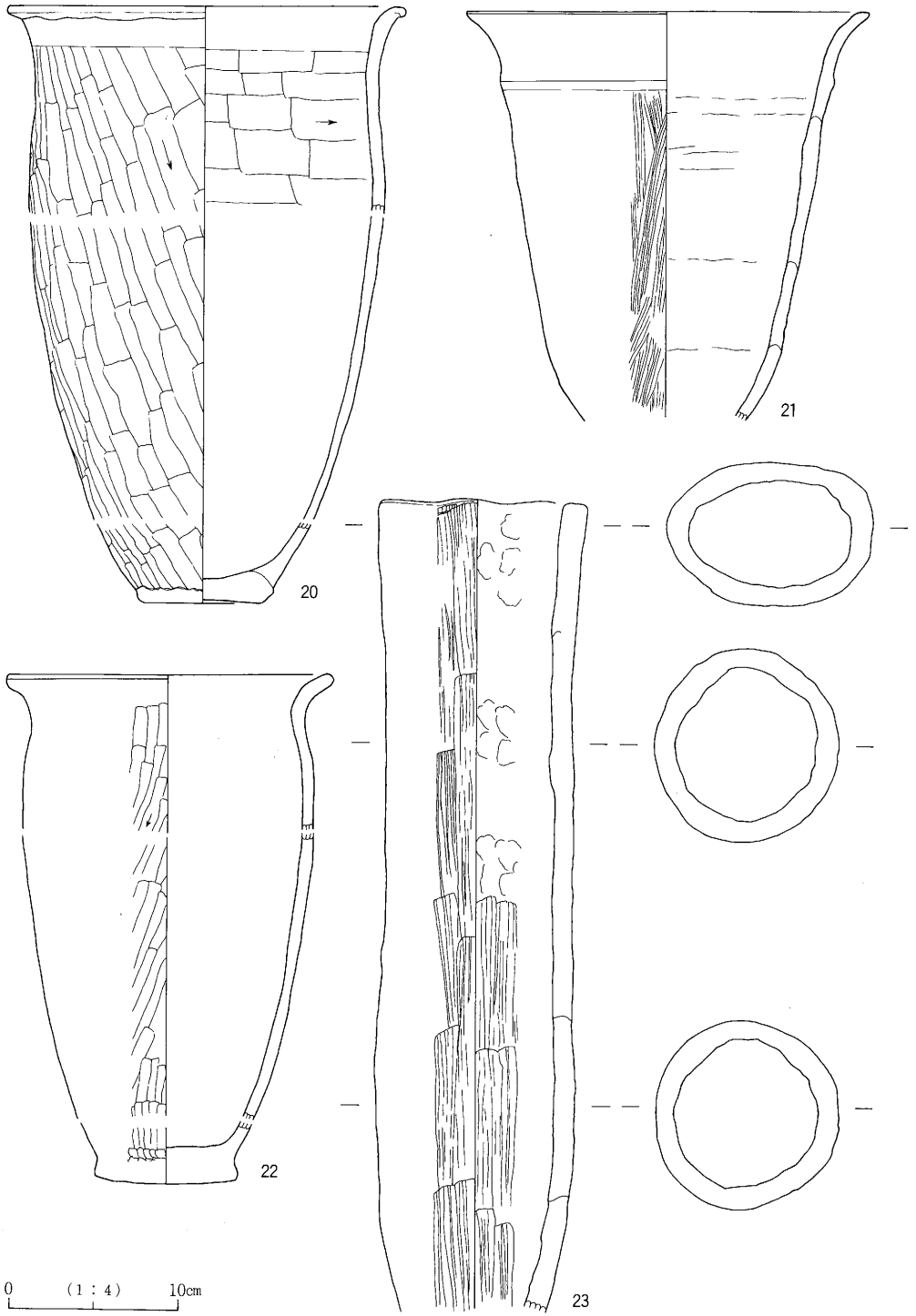
第7図 H3号住居址出土遺物実測図(1) (1:4)



第8图 H3号住居址出土遗物实测图(2) (1:4)



第9图 H3号住居址出土遗物实测图(3) (1:4)



第10图 H 3号住居址出土遗物实测图(4) (1:4)

2) H16号住居址

遺 構 (第11・12図)

本住居址は、い—18・19・20、う—18・19・20、え—18・19・20・21グリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係は認められないが旧校舎建設時のカクランを受け、北壁・南壁及び床面の一部が破壊されている。平面形態は長軸8.74m、短軸8.6mを測り、比較的整った方形を呈し、対角線上に1:3:1の割合で支柱穴、竪穴がプランニングされている大型の住居址である。カマドは西壁中央付近に位置し、カマドを軸とした主軸方位は、N-76°-Wである。住居覆土は2層に分けられ、1層は礫などを含む黒褐色土層、2層はやや暗い色調を呈する黒褐色土層である。

確認面からの壁高は約30~40cmを測り、床面からの立ち上がりは比較的緩やかである。壁溝は、カマド南側の壁面下に確認されない以外は、他の壁面下に確認され、溝幅7~18cm、深さ2~5cmを測り、断面U字状を呈する。

床面は、地山第IV層を利用して構築されたが、堅固な状態ではなかった。

ピットは7個検出され、P1~P3、P7が支柱穴と考えられる。P1~P4は楕円形、P6は円形を呈する。P5は浅く約6cmであるが、他は約47cm以上の深さである。

カマドは比較的良好な遺存状態であった。構築材には、石と粘土が使用され、袖部先端部には、円筒形土器が芯材として使用され、右袖では逆位に埋設されていた。火床面には、2個体の土師器長胴甕が重なった状態で潰れていた。この出土状況より、天井部として使用されていたものが、潰れたと見られる。また3個の甕底部が正位に埋設され、土師器蓋(1)、須恵器蓋(2)が入子状に出土している。

遺物の出土状況は、カマド以外では西壁際より5が逆位で出土した。比較的遺物の少ない住居で、他にカマド北東より9や鉄滓の細片が出土した。

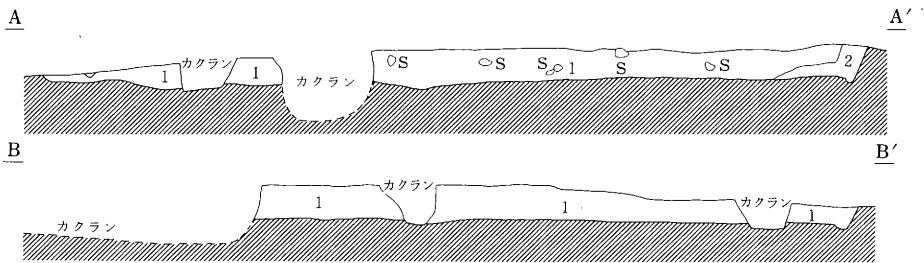
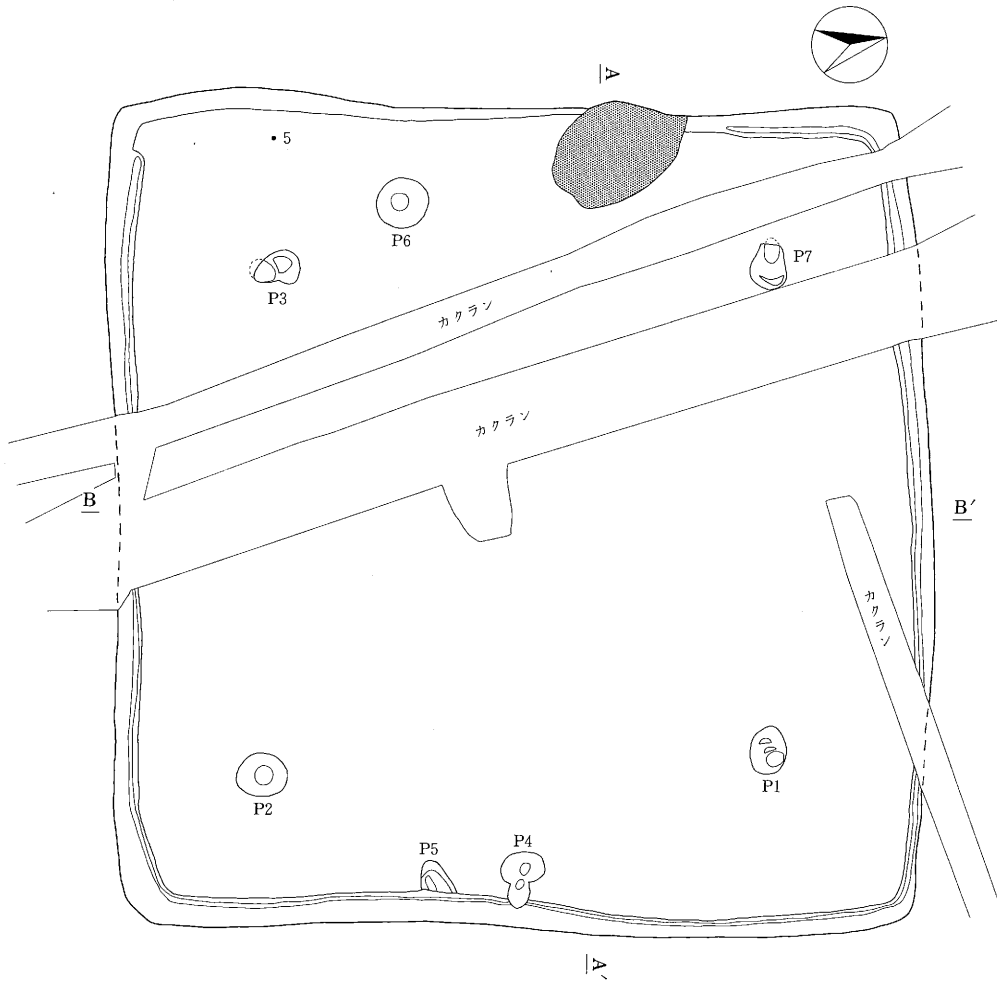
遺 物 (第13・14図)

本住居址からは、土師器の蓋・長胴甕・甕と須恵器蓋以外に羽口・鉄滓の出土があった。今回図示できたのは、土師器蓋と長胴甕1個体、甕と須恵器蓋・羽口である。

土師器は1で、天井部にヘラケズリ、内面に黒色処理が施される。須恵器蓋は2・3で、2は天井部にヘラケズリが施され、3は灰白色を呈すが風化が激しい。

土師器長胴甕には4・5があり、外面に縦位のヘラケズリが上から下へと施される。4は内面にナデ調整が左から右へ、5はヘラケズリの後ナデ調整が施される。土師器甕は6~8で、6の外面には、ヨコナデの後タテナデ?の調整が施される。9は土製の紡錘車である。10・11は土師質円筒形土器で10は外面ナデ上げ調整、11は上から下への指ナデが施される。内外面には10・11とも巻き上げ痕が残っている。

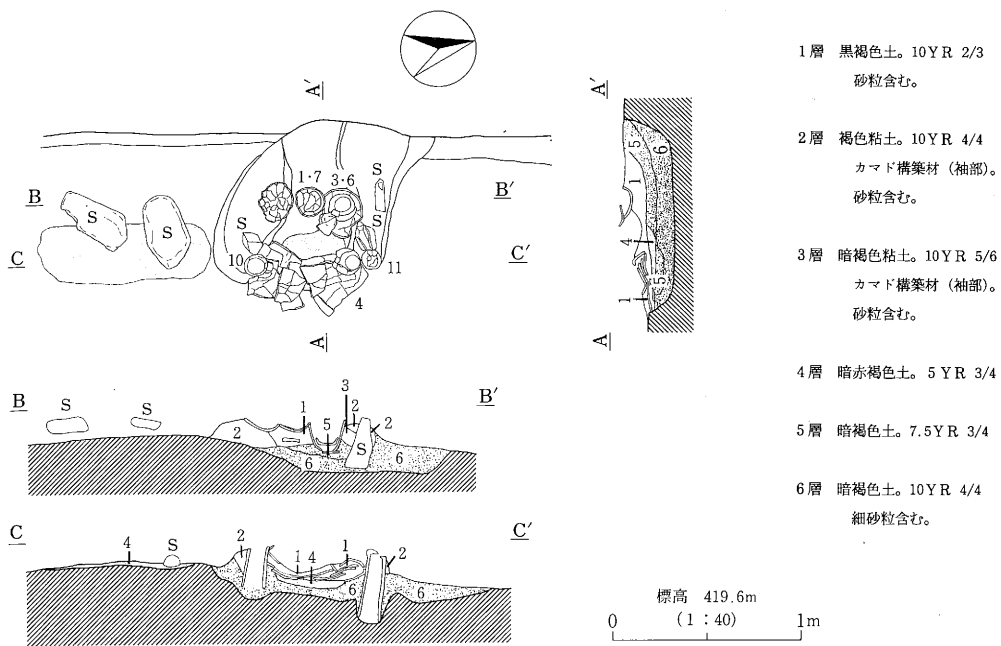
以上の出土遺物より、本住居の所属時期は古墳時代後期終末期である。



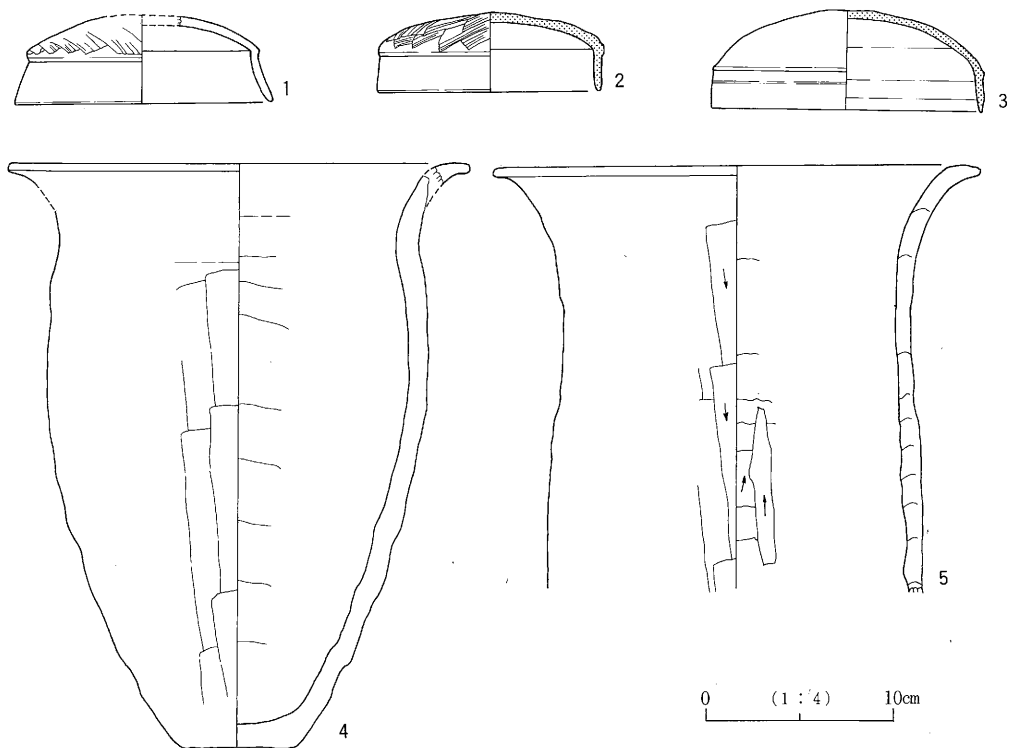
- 1層 黒褐色土。10YR 2/2
有機質土。礫（φ 1～5 cm）含む。砂粒含む。
- 2層 黒色土。10YR 2/1
有機質土。砂粒含む。礫（φ 1～3 cm）少量含む。

標高 420.0m
0 (1 : 80) 2m

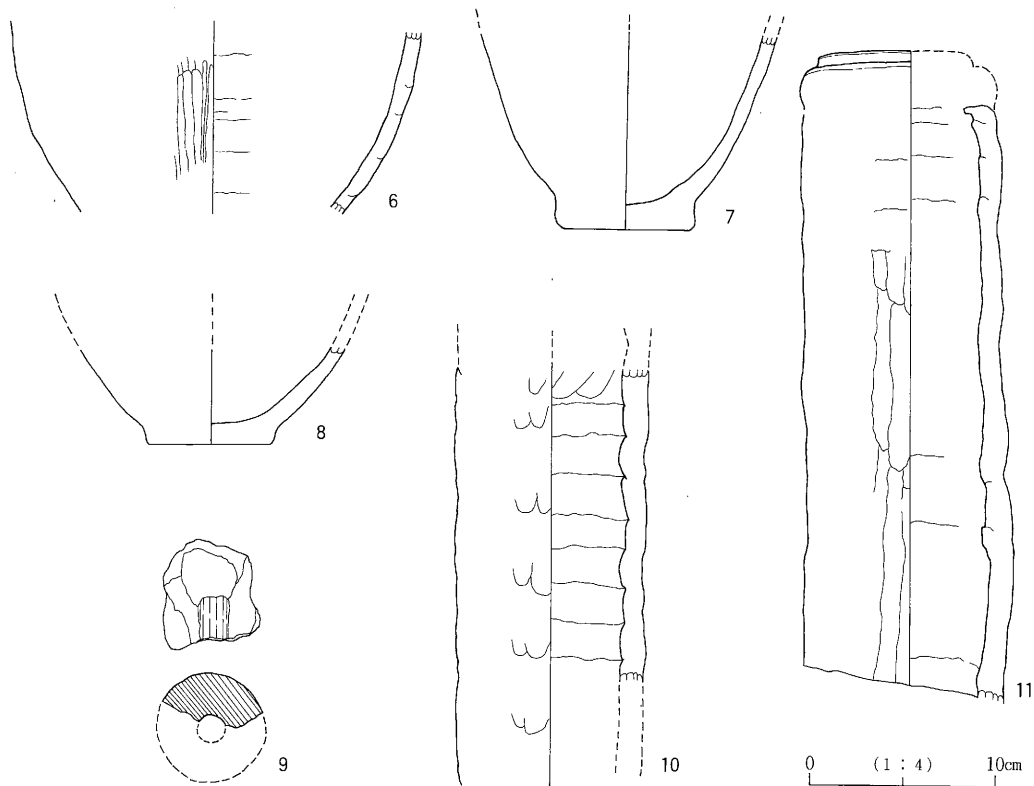
第11図 H16号住居址実測図



第12図 H16号住居址カマド実測図



第13図 H16号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)



第14図 H16号住居址出土遺物実測図(2) (1 : 4)

3) H15号住居址

遺構 (第15図)

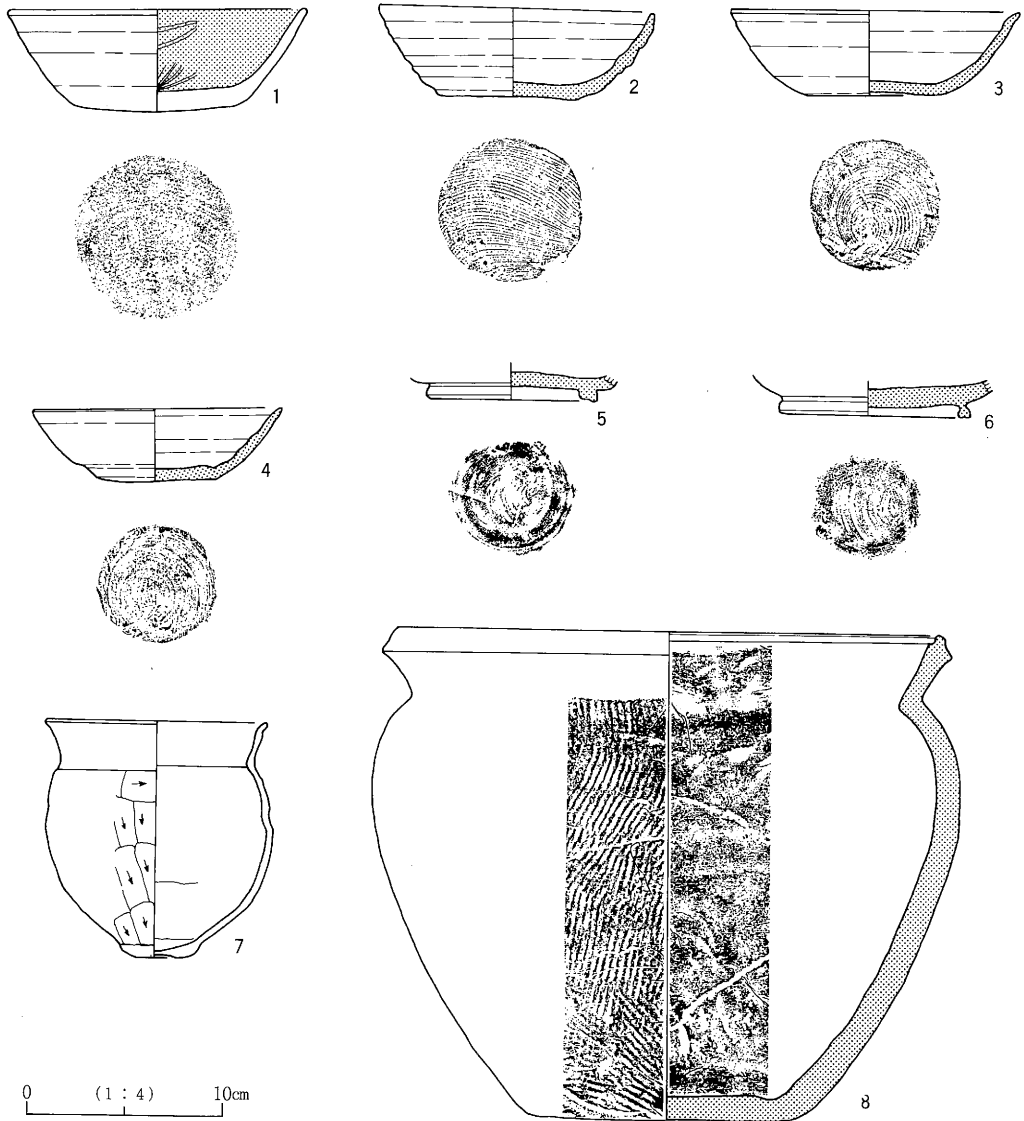
本住居址は、あ-14~16、い-14~16グリッドにおいて検出された。他遺構との重複関係は、M3号河川址、P83~85と重複関係にあり、住居南壁と北西壁の一部が破壊されている。平面形態は長軸4.75m、短軸3.5mの隅丸方形を呈するものと考えられる。カマドは東壁中央付近に位置し、カマドを軸とした主軸方位は、N-87°-Eである。

住居覆土は2層に分けられ、1層は礫を含む暗褐色土、2層は小粒の礫砂粒を含む暗褐色土層である。確認面からの壁高は20~30cmを測り、M3号河川址に破壊されてはいるものの、遺存状況は良好といえる。床面は地山第IV層を利用して構築され、平坦ではあるが、堅固な状態とはいえない。

ピットは4個検出され、P1・P2が支柱穴と考えられる。P1~P3は楕円形を呈し、5~10cmの深さである。P4は南壁下に壁と接して検出され、ピット上面は焼土が認められた。覆土

中には、土師器、須恵器の坏が検出された。

カマドは、今回図示できなかったが、多数の礫を「ハ」の字状に配し粘土で覆う構築手法である。天井部が残存し、比較的遺存状況は良好であった。カマドの北側に焼土が検出され、そこには粘土の残骸も検出されていることから、当初カマドがあったことも推定でき、何らかの原因で移築されたものである。遺物の出土状況は、住居南東コーナーに集中しており、カマド北側のテラス上より8の須恵器甕が出土した。P4からは3の須恵器坏が正位に、その上には1の土師器坏が逆位に合わさったかたちで出土した。



第16図 H15号住居址出土遺物実測図 (1 : 4)

遺物 (第16図)

本住居址より出土した遺物には、土師器では坏・小形甕があり、須恵器では坏・甕が出土して
る他は、器種にバラエティが少ない。

土師器坏は1で、ロクロ形成されており、底部ヘラ調整、内面には黑色処理が施される。

須恵器坏には4があり、5・6は須恵器高台付坏である。2は静止糸切り、3・4は回転糸切
りである。4の口縁部には、ゆがみが認められる。5・6は糸切りの後、ナデ調整が施される。
土師器小形甕は7で、外面にヘラケズリの後、口縁部にヨコナデが施される。

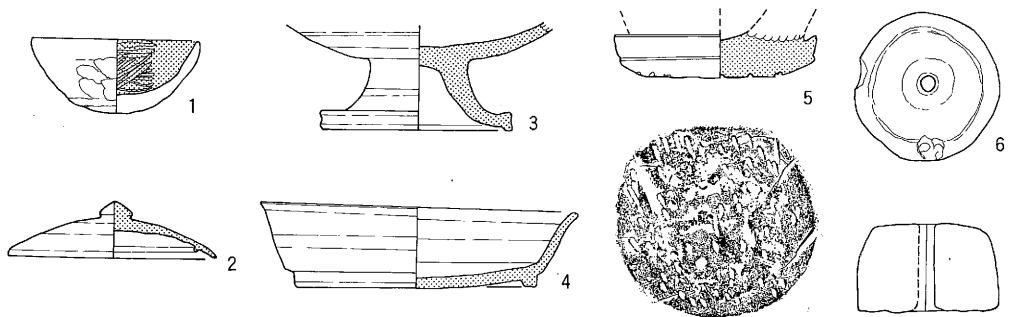
須恵器甕は8で、口縁端部がつまみ出され、外面に叩き目調整が施されている。

以上の出土遺物より、本住居址の所属時期は、奈良時代末葉である。

4) その他の遺物 (第17図)

1は土師器の内面黑色処理の施された手捏土器で、外面に指頭痕・研磨がみられる。H 4号住
居址からの出土である。2は焼成の良い須恵器蓋で、小形の宝珠形つまみを持ち、かえりのある
ものである。M1号溝状遺構からの出土である。3は焼成の良い須恵器高盤で、坏底部に回転に
よるケズリが観察できる。H 9号住居址からの出土である。4は焼成の良い須恵器の高台付坏で、
底部はヘラ切り調整が反時計回りで施され、つけ高台より底部の方が若干下がっている。H 9号
住居址からの出土である。5は焼成の良い須恵器播鉢の底部で、底部には浅い刺突がある。H 4
号住居址からの出土である。6は土製の紡錘車で、比較的大きなもので重量は325gを測る。H
13号住居址からの出土である。

以上、今回の調査で出土した遺物を少ないながらも図示してみたが、2～4は古墳時代後期か
ら奈良時代の典型的な遺物であり、5は他遺跡でも出土例の少ない珍しい器種である。



第17図 出土遺物実測図 (1 : 4)

第V章 まとめ

今回の調査では古墳時代後期から平安時代の集落の一端が判明した。とりわけH3号住居址の古墳時代末葉一括資料は注目され、今後とも該期の研究に役立つであろう。詳細は本報告にゆずることとするが、若干出土遺物の検討をしておいた。

また、今回とりあげたH3号住居址、H16号住居址の他にH4号住居址からは土師質の円筒形土器が出土して注目される。この土器は、概して器壁は脆く外面に縦位のハケ調整がなされ、底部が残存し木葉痕のあるものもあるが、焼成後底部を欠損するものもある。これらの出土状態はカマドに直接伴うもの2個体、周辺部より2個体で、H3号住居址ではカマドの天井部に使用していたものと推定できるものもあり、H16号住居址では明らかに袖部の構築材として使用されていたものもある。また近接する北浦遺跡⁽¹⁾でも底部を欠損したものが、カマドより出土している。この種の土器は、県内では田中沖遺跡⁽²⁾、中道遺跡⁽³⁾、北垣外遺跡⁽⁴⁾などにみられ、時期的には古墳時代後期と考えられている。なお、県外例では、山梨県に分布の中心があるようで、御坂町二之宮遺跡⁽⁵⁾、姥塚遺跡⁽⁶⁾、郷土遺跡⁽⁷⁾、石和町松本塚ノ越遺跡⁽⁸⁾などでも出土しているようである。これらは、萩原三雄⁽⁶⁾、猪股喜彦⁽⁸⁾両氏の指摘するように底のあるものとないものの2種に分けられ、ないものには最初から底部のないものと、意識的に欠損させたものの更に2種に分けられ、計3種である。本遺跡では、底部の確認できるものはH4号住居址出土のもののみで、一部に木葉痕をとどめ他は欠損されている。その出土状況はカマドの芯材とみられ、天井部・袖部に使用されている状況である。土師質の円筒形土器の性格や機能の一端を示唆しているものと言える好資料であろう。しかしまだカマドの芯材として製作されたものか、あるいは他の目的に製作されたものが、更に転用されたものかは不明である。また、他遺跡で見られるものは輪積み痕を残すものに対し、本資料群は巻きあげ成形であるという点にも留意されねばならない。

以上円筒形土器に限って若干ふれておいた。この種の資料群は本遺跡の性格を位置づけるものとして極めて重要な位置にあるものと言える。今後とも詳細な検討を行いたいと思う。

注

- (1) 長野市教育委員会他 1980『田中沖遺跡』
- (2) 長野県教育委員会 1974『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書』上伊那郡箕輪町一
- (3) 信濃毎日新聞 1992年10月31日記事によるとカマド祭祀遺物とされている。
- (4) 山梨県教育委員会 1987『二之宮遺跡』
- (5) 山梨県教育委員会 1987『姥捨遺跡 姥塚無名墳』
- (6) 御坂町教育委員会 1979『御坂町の埋蔵文化財』「郷土遺跡」
- (7) 石和町教育委員会 1990『松本塚ノ越遺跡』
- (8) 猪股喜彦 1982『丘陵』第9号「一宮町鞍掛遺跡発掘調査報告(1)」



H3号住居址遺物出土状況（東より）



H16号住居址（東より）



H3号住居址カマド (東より)



H16号住居址カマド (東より)



H15号住居址 (西より)



H15号住居址カマド (西より)



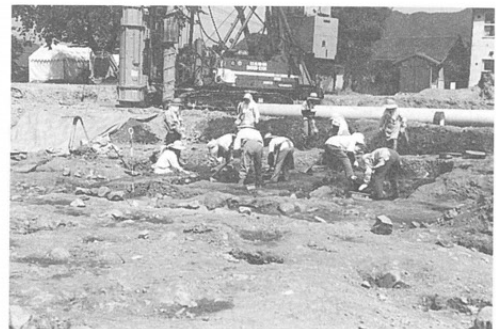
H15号住居址P4遺物出土状況 (東より)



作業風景



終了式



作業風景

あとがき

坂城中学校全面改築に伴う緊急発掘調査は、非常に切迫した時間帯の中で行われた。そうした条件の中でも優秀な記録と整理が行われたことを、本当に心から慶ぶものである。激烈な暑さの中を、自己の第一義を超えて献身した関係者の皆様にまず敬意を表わさずにはおれない。概報とは言え本書の上梓をもって、その一端に報いることが出来れば幸いである。

中之条遺跡群、宮上遺跡は、かつて未調査のまま中学校が建築されてしまった。時代が文化財に対する認識を欠いていたからである。今日はせめてもの処置として緊急発掘調査による記録保存が義務づけられている。その結果坂城中学校敷地内である宮上遺跡は、古墳時代末期から奈良・平安時代に及ぶ集落遺跡であることが判明した。坂城町の中学生はその古代の集落遺跡の上で、毎日勉強しているのである。その歴史の重みを、人々の足音と共に肌で感じてほしいと願わずにはおれない。

坂城広谷は中央を千曲川が北流し、善光寺平の南の玄関口で、安定した素晴らしい気候に恵まれている。ここに古代文化が華開いたのは不思議ではない。古墳あり、集落あり、窯業工房あり、古寺院あり、経塚あり、製鉄遺跡ありで、やがては古代末の武族集団を生み出して行く。みんな偶然では有り得ない。もしかすると、中之条遺跡群のとりわけ宮上遺跡にその原点があったのかもしれないのである。その遺跡にかかわることの出来たことを、本当に心から嬉しく思うものであり、感謝の念に共々にひたれるのである。

直接現場で調査に御尽力いただいた皆様にまずは改めて御礼を申し上げると共に、すべての関係者の皆様、関係機関の皆様に感謝の言葉を捧げたい。御協力ありがとうございました。

1993年3月30日

調査団長 森 嶋 稔

中之条遺跡群 宮上遺跡 II

発行日 1993年3月30日

編集者 中之条遺跡群宮上遺跡II発掘調査団

発行者 坂城町教育委員会

〒389-06 長野県埴科郡坂城町大字坂城10.050番地
TEL 0268 (82) 2069

印刷者 森出版

〒381 長野市吉田4-3-4
TEL 0262 (43) 1201

